牛伝染性リンパ腫対策について

家畜衛生ニュース
令和4年7月号
愛知県東部家畜保健衛生所

牛伝染性リンパ腫（EBL）はウイルスを原因とし、リンパ節や心臓、消化管に腫瘍を形成する疾病です。感染後数か月～数年の無症状期を経て、数％が発症に至ります。発症率は低いように見えますが、ウイルス感染による乳量・乳質の低下、枝肉重量の低下の可能性も指摘されています。もちろん発症牛はと畜場で全廃棄になってしまいます。残念ながら現状有効なワクチンは存在しないため、ウイルスの伝播を防ぎ“感染させない”ことが最も重要です。

EBL対策のポイント

●人為的伝播対策

除角、去勢、耳標・鼻環装着など出血を伴う可能性のある作業時は確実な止血および器具の洗浄・消毒を徹底しましょう。基本的な対策ではありますが、感染牛の血液が創傷から侵入する可能性があり、最もリスクが高い伝播経路です。

●垂直伝播対策

妊娠中や分娩時のほか感染牛の乳汁から伝播する可能性があります。感染牛由来の初乳を与える際は、加温処理（60度で30分、パスチャライザーの利用も◎）や凍結処理（一晩凍結、家庭用冷凍庫でも◎）を行いましょう。感染牛からの妊娠中の感染リスクは、ウイルスが感染している細胞量にもよりますが、後継牛を取る際は受精卵移植技術の活用も検討しましょう（ウイルスは生殖細胞へは感染しません）。

●水平伝播対策

吸血昆虫による吸血時の伝播の可能性があります。昆虫が感染牛を吸血後、口に付着した血液が乾燥すればウイルスは失活するため、感染牛と非感染牛を分離するだけでも意味があります。忌避剤の利用も◎ですが、種類や散布場所、持続期間を考慮したうえでの使用が重要です。

一部のEBL検査については補助事業も利用可能です。まずは自農場の感染状況の把握からはじめてみるのはいかがでしょうか。
EBL対策は多岐にわたり、根気強い取り組みが必要です。農場により状況が異なりますので、対策や検査などわからないことがあればご相談ください。